

海外のシニアライフって？

OVERSEAS REPORT VOL.4

from India

海外レポート第4弾はインド！インド政府に勤め首相の通訳もしながら、立命館アジア太平洋大学の教授もこなすアショク・チャウラさん(52歳)に紹介していただきます。大家族システムの崩壊や価値観の変化の波を大きく受けるのは高齢者の方々。その現状と、その対策としての考えを2回にわたりお伝えします。



インドはつい最近までは大部分が農業文化で、大家族システムがさかんでした。つまり、人口のほぼ70%以上は農村で農家生活をしていました。一つの村には10~50世帯が住んでいて、1世帯は10~30名の大家族が普通でした。同じ村の中には世帯同士で血のつながりがなかった場合も、その相互依存レベルが非常に高かったため、ほぼ毎日何らかの形で交流がありました。小さい村だと店もなくて、日常生活の必需品の調達、畑と森林が繋がっていたケースもあったので野獣に対する恐れ、または家事などの心配があり、隣村同士の相互依存性も高いものでした。たぶん、インド哲学も昔からそのような環境に基づいてきたもので、世帯主は最高権限があつて、兄弟関係、上下関係はしっかりと定義されていて、インド全国でほぼ共通の

システムでした。高齢者のお世話や病人のお世話は大家族だと役割分担で、実質的にはその負担も緩和され、そもそも負担という感覚は薄かったようです。農村と違って、都会の場合、少なくとも1947年の独立以降は大家族があつたとしても、高齢者のお世話は多くの場合課題でしたが、周りや親戚関係がどう思つか、神様からのパチが当たるという懸念などもあって、何とか対応されてきました。しかし、残念なことに、この数十年でインド社会は近代化の波に乗りつつ、物質的な面が強調され、物価も異常に高くなり、その影響は農村でもみられるようになってきました。家族の男性メンバーは単身または自分の家族連れて都会へ異動し、大家族システムも価値体系も崩れつつあります。世界共通現象として人間

介護の問題は世界的！ インドでの近代化の副作用

が忙しくなると一番影響を受けるのは高齢者の方で、残念なことにその声も小さくなくて、それほど目立たない深刻な問題になる恐れがあります。また、哲学や価値観の影響が一部残っていて、高齢者の方は元気な内はほぼ問題なく尊敬され大事にされますが、簡単に治らない病気にかかった場合や経済的な力がまったくない場合、大変な状況になるケースが多くみられます。先進国と違って政府側も色々な手を打ってはいますが、本当に必要とする人までその支援が届くケースは少ないです。

ある調査によると今現在、インドの60歳以上の人口は1億人を超え、そのうち33%は最低生活線以下、90%は未組織労働者で、73%は読み書きができず肉体労働しかできない人です。1997年の政府予算では高齢者福祉に500万米ドルの割り当てがありました。この数字はその後も増えているはずですが、1億人のニーズには応えきれません。高齢者医療・介護のためにはオールド・エイジ・ホームが約200軒、デイケア・ホームが約300軒に加え、移動式の医療車数十台そして一次ヘルスケアセンターがあります。しかし、社会的に自分の親を高齢者施設に預けることはタブー視されています

ので、ケアしないで家におくことが多いです。また、読み書きが少なくて、自分の権限に関して認識度が高い場合、肉体的に動く力のある高齢者は何とか政府の病院やその他の施設の無料サービスを利用することができますが、癌、脳梗塞など病気の重い方々のための介護センターはほとんどないと言っているくらいです。このようなケースになると本人はもちろん、面倒を見る側も、大変な状況に置かれてしまいます。(つづく)

なにかいい解決策はないのでしょうか。誰にとっても重要な課題ですが、今回はアショクさんからの提案などをレポートします。お楽しみに!

プロフィール:
デリー大学卒(植物学)、ネルー大学卒(日本語修士)後、文部省の国費研究生として日本の東京大学、国立国語研究所に留学。現在インド国立科学コミュニケーション情報資源研究所(NISCAIR)の教官。立命館アジア太平洋大学客員教授。工業通訳としてTQMやデミング審査にも携る。著書・論文多数。親日家。

今年も大盛況！ 第8回 共に生きる障がい者展



障がい者の自立をテーマに、イベントや展示を行う「共に生きる障がい者展」を9月の3連休に開催しました。今年で8回目を迎えた「障がい者の祭典」の会場は堺市泉ヶ丘の国際障害者交流センター ビッグ・アイ。初日はオープニングイベントで元阪神タイガースの赤星憲広さんと橋下知事の対談があるということで早くから大勢の方々詰め掛けました。障がいのある人の就労をテーマにしたふれあいトークでは、「勇気をもって一歩踏み出せば、どんな壁でも乗り越えられる」と、赤星さんが自らの体験をもとにメッセージを送りました。恒例の障がい者作品展やIT機器展/ユニバーサルデザイン生活展も盛況。他にも府内で音楽活動をする障がいのあるミュージシャンによる障がい者芸術コンテストや文化芸術展(車いすダンスの演舞、よさこいソーラン体験など)も華やかに行われました。また、今年は屋外で地元作業所による出店販売もあり、子どもから大人まで多くの方々楽しめるイベントが盛り沢山。豪華賞品が当たる大抽選会のある夕方まで連日大賑わいでした。

問題に挑戦！ なにわなんでも® 大阪検定

A 野球が盛んな大阪では、日本球界を代表する投手を数多く輩出していますが、次のうち入団したプロ野球チーム(【 】内チーム在籍時)でエースナンバーと言われる背番号18をつけた投手は誰でしょうか？

- ①桑田真澄【巨人】 ②野茂英雄【近鉄】
- ③上原浩治【巨人】 ④黒田博樹【広島】

B 江戸時代、現在の大阪市内には約200の橋が架けられていたと言われていますが、道頓堀川に架かっている日本橋は当時の大阪では12しかない、ある特徴をもった橋の一つでした。その特徴とは何でしょうか？

- ①町人が私費で管理していた ②江戸幕府が管理していた
- ③2階建て構造だった ④鉄製であった

▶解答は下に表記◀
出典：大阪商工会議所「第1回大阪検定」より
お問合せ：なにわなんでも大阪検定事務センター
TEL 06-6452-7728(平日10:00~17:00)

和紙はちぎるが、人との関係はどんどんつないでいきます！

おおさかシニアサポーターバンクの活躍④ ちぎり絵クラブ
9月16日(木) in 軽費老人ホーム来友館(泉佐野市)



「皆さん、お久しぶり！今年の夏は暑かったですねえ」来友館で月1回開催している「ちぎり絵クラブ」の講師を務める藤江さん。丁度、来週は十五夜ということもあり、本日の作品テーマは、「お月見」。お手本を見ると、かなりの大作になりそうです。細かく和紙をちぎっていく作業は、思った以上に難しそうです。「固くてちぎりにくい」「年取ったらこんな作業は大変だ」「肩がこるわ」と言いながらも真剣に取り組む皆さん。8名の参加者に藤江さんが一人ひとり声をかけながらの賑やかな時間。リハビリや脳トレ効果でも注目される「ちぎり絵」は施設内クラブでも一番人気で、気がつけば一年も続いているそうです。季節に応じたテーマを考えお手本を作り、時間配分を考えたり材料をセットしたり…下準備は大変ですが、「雨の日も風の日も、待っている人たちがいるし、楽しいから続けられる」と藤江さん。苦労しながらも作品を作り終えた皆さんも大満足のひと時でした。

楽しいから、待っている人がいるから、続けられるんです



読者の宝箱 第四回

みなさんの「宝物」をご紹介します！
絵や写真、引き出しに眠っているラスタター、思い出の品々…

ノーベル賞受賞者から頂いたお宝 ~各先生に切手を差し上げて~

伊藤良一さん 80歳

ノーベル賞受賞者に関する切手が多くの中から発行されています。福井謙一先生、白川英樹先生、小柴昌俊先生を描く切手を見つけて入手し、それぞれの先生にお贈りしました。皆さん大変喜んで下さり、お礼状やサイン入りのお写真、受賞講演の公式記録などをいただき、私の宝物になりました。これも化学切手~科学切手を40年この方集めてきた成果です。今後もこのような宝物を増やしていきたいと思っています。

